2017年1月25日　朝日新聞 掲載

古楽器 子ども魅了し35年

「ロバの音楽座」来月11日 立川で公演

ステッキのように曲がった笛「クルムホルン」、箱形の琴のような「プサルテリー」……。中世・ルネサンス時代の古楽器やオリジナルの楽器が奏でる独創的な音楽で子どもたちを魅了してきた「ロバの音楽座」が、今年結成35周年を迎える。2月11日には地元立川市でコンサートを開く。

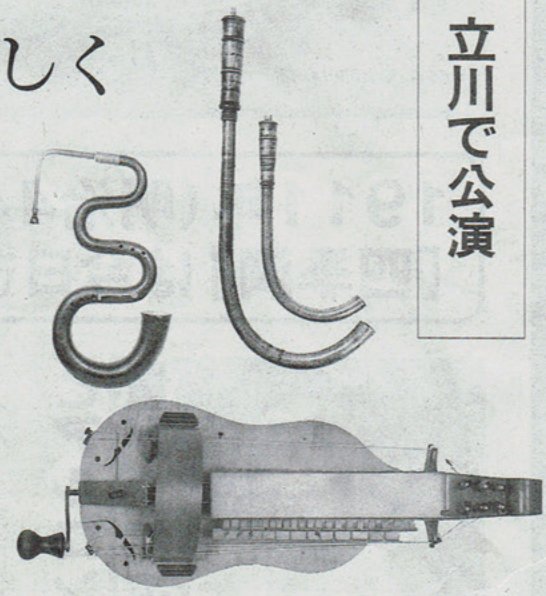
リーダーの松本雅隆さん（64）は国立音大の学生時代、現代の楽器の音色とは違う古楽器に魅力を感じ、1973年、中世・ルネサンス音楽の「カテリーナ古楽合奏団」を結成した。海外で楽器を集めたり、当時の絵画をもとに楽器を再現したりして、独自の音楽の世界を作り出している。

「コンサートのぼうけん」に出演する松本雅隆さん（左から2人目）ら「ロバの音楽座」のメンバー＝ロバの音楽座提供

ステッキ？ 蛇？ 形も音も楽しく

昔の人のように、どんなものも楽器にして音楽の世界を楽しめることを子どもたちに伝えたい、と賛同した音楽家と82年に立ち上げたのが、子ども向けの合奏団ロバの音楽座だ。名前は中世南仏の吟遊詩人の「ロバの詩」にちなんだ。大好物の夢を見てうれしくなって歌ったロバの下手な歌声が人を優しく包むという歌詞で、「夢見る歌声は人を優しくできる」という意味をこめた。松本さんら6人を中心メンバーに数人編成で活動している。

コンサートで使う楽器は形も音も珍しく、子どもたちの好奇心をかりたてる。毎回登場する「セルパン」は「蛇」という意味の曲がりくねった管楽器で、メンデルスゾーンの楽曲にも使われたという。チェロのようでチェロでない「ビオラ・ダ・ガンバ」。「ハーディ・ガーディ」はハンドルを回すと木の円盤が弦をする。バグパイプのような音の伴奏が特徴だ。新聞紙やバケツなどを使い自由な発想で作った「空想楽器」も古楽器の音と融合して楽しませる。



㊤㊦クルムホルン　「曲がった笛」の意味の木管楽器
㊤㊦セルパン　16世紀終わりごろに生まれたとされる低音の管楽器
㊦ハーディ・ガーディ　手で回し、鍵盤でメロディーを奏でる

活動内容は幅広い。立川市幸町の玉川上水のほとりにある「ロバハウス」を拠点に、ライブやワークショップを開くほか、全国の学校やホールでも公演する。結成の1、2年前から毎年夏に、子どもと空想楽器を創作して音を楽しむ3泊4日の「ロバの学校」を長野県などで開いてきた。

また、NHK「いないいないばあっ！」など教育番組で音楽を担当。詩人の谷川俊太郎さんらとも交流が深く、瀬戸内国際芸術祭を機に高松市の大島にあるハンセン病療養所で開かれるイベントでは絵本作家、田島征三さんのライブペインティングと共演した。

「音楽の原点は音を楽しむこと。石ころの音、風の音、水の音……と、子どもたちは感性に響く音が大好き。それを音楽と気づかせてくれる環境が大切です。35年たちましたが、これからもっと、音楽や楽器は自然の音の延長であることを感じながら演奏したい」と松本さんは話す。

◇

2月11日の「コンサートのぼうけん」は午後2時から、たましんRISURUホール大ホールで。踊りも交えて演奏する。料金は親子ペア3500円、大人2500円など。チケットは同ホール（042・526・1311）。（宮坂麻子）